

谷崎潤一郎の『吉野葛』を読んで

新田由紀子

吉野の地は歴史のロマンを秘めている。白洲正子の『かくれ里』には、「吉野の川上」と題して、次のように書いてある。

――吉野は古くから伝統的な「かくれ里」であつた。天武天皇が、壬申の乱に、いち早く籠られたのは有名だが、西行も義経も、南朝の天子方も、近くは天誅組の落人に至るまで、「世のうき時」に足が向かうのは、いつも吉野の山奥であつた。――

本書『吉野葛』は、吉野の山間に南朝天皇方の事蹟を取材する紀行文の形で始まる。道中で目にする由緒ある景勝地や文物を描く筆は悠々自在で、脱線するかのように古典芸能のさわりをからめつつ、日本の山里の風情を眼前に繰り広げる。秘境や民俗、古典芸能や日本文化好きの読者が酔わされるうちに、これから展開する物語の伏線と因縁は組み込まれ、同行の友人津村の打ち明け話で、この紀行文は谷崎ワールド全開の母恋小説となっていく。

大阪の質屋の跡取り津村は、幼い頃に垣間見たはずの亡き母の姿が恋しい。自分を、母狐を追う子狐に重ねて母の面影を慕う。「狐」の因縁は、家内で親しんだ地唄・箏曲の演目から、義経伝説の初音の鼓へ、そして母の里の稻荷信仰へと繋がり、奥吉野の紙漉きの村、国栖くすに母の生家を探しあてる。さらに、その縁者の娘を見初めて御料人に迎えるという大筋だ。そもそも、母の里をつきとめた鍵は、祖母が若き母にあてた一通の手紙だ。一里の生業は紙漉き故、手紙は大事に――お稻荷様を信ずるよう――とあり、母探しの導線となっている。幻の母も妻も因縁の糸で自分と繋がっていたのだという。

現代の読者には懐旧の趣きのある事物とエピソードだが、奥吉野の風物は幾層ものニュアンスをもって美しく描かれ、民間伝承と共に息づく「かくれ里」の人々の姿も鮮やかだ。さらにまた、頁を繰るごとに、由来ある地名の数々がロマンをかきたてる。

心無い開発の魔手が及ばぬうちに、文人を気取って奥吉野を旅してみたい。